あ と が き

我生何処来（ワガショウイズコヨリキタル）
去而何処之（サリテイズコカニユク）
独坐蓬窓下（ヒトリホウソウノモトニザシ）
兀々静尋思（ゴツゴツシズカニジンシス）
尋思不知始（ジンシスルモハジメヲシラズ）
焉能知其終（イズクンゾヨクソノオワリヲシラン）
現在亦復然（ゲンザイマタマタシカリ）
展転総是空（テンテンスベテコレクウ）
空中且有我（クウチュウシバラクワレアリ）
況有是与非（イワンヤゼトヒトアランヤ）
不如容些子（シカズシャシヲイレ）
随縁且従容（エンニシタガッテシバラクショウヨウ）

良寛の漢詩(五言古詩)である。亡き博兄が病院に入院したという知らせを受けて、最初に亡き兄の所に持っていた図書が、良寛の漢詩のものであった。その後、何回となく、その入院している病室を訪れ、その度に、本の好きな兄が、多分、こんな本が読みたいだろうと、主として、文庫本を持っていたのであるが、病室あるいはベッドが一週間置き位に交替となることからか、その亡くなる少し前に、「この良寛のものを除いて、その他のものは持っていてくれないか」ということであった。それから、数日後に、兄は突然息を引き取ったのである。その枕元には、この良寛の漢詩の図書とその他宗教書が一・二冊と、生前には本の収集などを唯一の趣味としていた亡き兄には凡そ不似合いの遺品に、ある種の感慨を抱くと共に、この良寛の漢詩は、最後まで目を通していたのかと、そんな思いを深くしたのである。

そんな思いもあり、その良寛の図書を、亡き兄の棺に入れ、その葬儀の後、折に触れて、亡き兄を思う時、何時も、良寛の数ある詩の中で、この「我生何処来/去而何処之」、「展転総是空」、「不如容些子/随縁且従容」の、これらの句のあるこの五言の漢詩が思い起こされてくるのである。

誰我詩謂詩（ダレカワガシヲシトイウ）
我詩是非詩（ワガシハコレシニアラズ）
知我詩非詩（ワガシノシニアラザルヲシッテ）
始可与言詩（ハジメテトモニシヲイウベシ）

この良寛の漢詩(五言絶句)については、亡き兄が退院をした暁には、三好達治の「太郎を眠

らせ、太郎の屋根に雪降りつむ / 次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降りつむ」の「雪」の詩と共に、当時新築中であった工房の一室の襖に、白墨で揮毫してくれる手はずになっていたのである。そして、退院したらその工房に、体力が回復するまで、そこで静養して、そこから、自治医大の病院まで通院をしょうと、そんな話を二人でしていたのである。その亡き兄が精魂をこめての、その終生のライフワークとした「詩」とはいかなるものなのであろうか?　この良寛の漢詩の「我詩是非詩」というのが、その実態なのかも知れない。

亡き兄が昭和四十五年に刊行した一冊の詩集『樹神』の高内壮介氏の「跋」文は、次のような文章で始まる。

「人間、このあやふやのもの。一皮むけば、人間とは何かという答えは永遠の謎なのかも知れない。古来、思想とはこのあやふやなものへの、命綱のない<綱渡り>であったかも知れぬ。神の中にある人間、神を殺す人間、赤子がはじめて立ちあがったときのおどろきを、そのまま人間の独立と独断する人間。しかし、このような人間への独断より、人間への疑問を、一つの、<問い>としての言葉に凝固させることこそ、現代の呪祭というものなのだ。(以下、略)　」。

亡き兄が、その『樹神』の「あとがき」で、「すぐれた批評家・詩人」という措辞を呈した高内壮介氏の、この「人間への疑問を、一つの、<問い>としての言葉に凝固させる」、その「命綱のない<綱渡り>」のような所作こそ、「詩人」という所作であり、その所作より生まれ出る「詩」とは、その「呪祭」の「呪文」のようなものであり、そして、それは良寛の記すところの「我詩是非詩」というものと、まさしく突合するものなのかも知れない。そして、その「非詩」の「詩」の中核に位置するものこそ、良寛の「可憐好丈夫(カレンナルコウジョウブ)/間居好題詩(カンキョヲコノンデシヲダイス)」で始まる五言律詩の次の一節こそ、その実態のように思えるのである。

不写心中物（シンチュウノモノヲウツサザレバ）
雖多復何為（オオシトイエドモマタナニヲカナサン）

「　『　蝶が降る
　　――　黒い蝶類
　　たじろぎみじろぎ
　　わたしは埋まる　　高柳重信『蕗子』　　』

「生」とはいったい何なのだろうか。人はすでに、死を抱えて生まれ、死を抱えて生き、そして、死を全うする。生と死を全うするために人はあるのだろうか。降りしきる黒蝶の鱗粉にまみれ、黒蝶の展翅の中に埋もれて、死んでゆく。それは母なるものへの回帰願望なのであろうか。光というものの経験のない漆黒の闇(黒い蝶類=胎盤)の中の生のあかし(みじろぎたじろぎ=胎児たちのかすかな動き)ではなかったのか。生も死も渾然となっていた遠い遠い日の原点をよみがえらせてくれる。(中略)　流罪の民の私たちをときじくも遠くかす

――

かに呼ばわっているあの声はいったい、誰の何の声なのだろうか。「蝶が降る/　黒い蝶類=漆黒の暗闇=胎盤」は、その人の影であり　/　たじろぎみじろぎ/わたしは埋まる=生も死も渾然となっている胎児たちのかすかな身動き」は、その人の響きなのであろうか。そして、もしも、生と死が全うするものであるとしたら、その人の影とは死の影のことであり、その人の響きとは死の響きのことなのであろうか。とすれば、母なるものへの回帰願望とは死への郷愁なのだろうか。エロスが死に至る生の希求だとするならば、重信の作品の底には、死に向かってなだれ落ちるようなエロスの渇望が見え隠れしているのではなかろうか。(中略)

●●○●
●○●●
★？
○●●　　高柳重信『伯爵領』の最後の句は
－○○●　　この記号で終わっている。

これらの重信の記号は、次のイコン(霊感)のメッセージなのではなかろうか。

●●○●　　死死生死
●○●●　　死生死死
★？　　エロス？
○●●　　生死死
－○○●　　－生生死(タナトス)　　」

(『ＡＲＯＲＩ』42　所収「高柳重信の世界(江連博稿)」)

亡き博兄が、数ある現代俳人の中で、最も関心をもって、そして、他の俳人を見向きもせず、アプローチをしつづけた俳人は、多行形式の俳句の金字塔を樹立した異色の俳人、高柳重信その人であった。そして、この高柳重信論について、詩とエッセー誌の『ＡＴＯＲＩ』に、『高柳重信の世界』ということで、その第４２号(昭和１２年１０月)以降、その連載を続けることとなる。

この亡き兄の高柳重信論を幾度となく読み返していると、つくづくと、先に掲げた、高内壮介氏の、亡き兄の『樹神』の「跋」の一文の、「人間への疑問を、一つの、<問い>としての言葉に凝固させることこそ、現代の呪祭」という指摘に思い至るのである。

すなわち、「詩人というのは、人間の生・死への<問い>の、その<呪祭>の<呪文>(詩人がその人の言葉により凝固させたもの)を樹立する人」とでもいうのではなかろうか…、ということなのである。それが故に、亡き兄は、詩人の一人(呪祭を司る一人)として、高柳重信という、卓越した詩人の、その呪文(詩)を読み解くことができたのではなかろうか…という思いなのである。そして、同時に、亡き兄が、そのライフワークとして取り組んできたところの、その「詩」への取り組みは、この高柳重信論の、この『伯爵領』の、この記号の解読の「生と死」、そして、それは、「生(エロス)と死(タナトス)」との取り組みではなかっ

たのではないか…、ということに思い至るのである。

ここまで来て、冒頭の良寛の「我生何処来 / 去而何処之」の問い掛けも、また、高内壮介氏の「人間への疑問を、一つの、<問い>としての言葉に凝固させることこそ、現代の呪祭」という指摘も、はたまた、亡き兄が。高柳重信の俳句をして、「生(エロス)と死(タナトス)」との取り組みと理解して、深い共感を示したことも、それぞれの、誰のものでもない、真底、自分自身の、真率な、「写心中物」を「言葉」(詩・評論など)として現出させたことに他ならなず、そして、それが一本の線となって、交響しあっているからに他ならないのではなかろうか。

さて、ひるがえって、かれこれ三十年間にわたる、この一千句を選句しながら、亡き兄の「詩」業における「生(エロス)と死(タナトス)」との取り組みにはほど遠いけれども、私自身の、真率な、「写心中物」を「言葉」(俳句)として、それを表現したところの、私の「生きざま」の一つの証明であることは、紛れもない事実であろう。

そして、この、真率な「写心中物」の俳句としての表現といい、その「生きざま」の一つの証明といい、それは、現在、私が所属している俳誌『橘』(松本旭主宰)の作句姿勢《(一)生きるための証明（二）具象的表現の大切さ（三）感動の焦点化（四）流転の実相の把握（五）風土とのかかわりの重視》と、全く軌を一にしているということがいえよう。このことは、これらの一千句の鑑賞にあたっては、この『橘』の五つの作句姿勢が、同時に、五つの鑑賞姿勢にも通ずるということを意味し、その創作年次や季語の見出しの付与、あるいは、ローマ字による詠みの付与、さらには、その詠みの「間」や「切れ」なども、作者自身のものとして付与してあるので、それらの一端について味わっていただければ、望外の喜びである。

この句集は、この「はじめに」にも記した通りに、亡き博兄に捧げるその鎮魂(レクエム)の句集であると同時に、亡き兄が最後まで自力で編集・刊行していた『南郷庵通信』の特別号として、これからのその継続への意思表明とその決意を秘めての、新たなる『南郷庵通信』の再スタートをきることの一里塚とするためのものでもある。この『南郷庵』(なんごうあん)は、亡き兄や私達が生まれ、育った、「西那須野町南郷屋(みなみごや)」の、その地名に由来するものであるが、亡き兄のいない今、しばらく、私が現在住んでいる「宇都宮市西の宮」にて、その再スタートを切ることといたしたい。(なお、自由律の俳人で名高い尾崎放哉の亡くなった、瀬戸内の小豆島の西光寺奥の院南郷庵(みなんごあん)とは偶然の一致でもある。)

また、この句集編纂の作業と併行して、永年ご指導を賜っている俳誌『橘』の松本旭主宰より、『橘』二十五周年・三百号記念大会の「評論」などの投稿のお誘いもあり、その題名も、この句集と同じく、「流れゆくものの賦」ということで、その作業を進めることができたことを付記しておきたい。

最後に、たまたま、亡き兄の葬儀に前後して、「栃木朝日俳壇友の会」があり、その折りの、石田よし宏選者の、「わが涙壷に蓋あり秋の虹」を頂戴して、その句に、「優しき兄に

秋桜燃ゆ」の付句を添えて、亡き兄の霊前にに供えたことを報告して、この「あとがき」を終わりにしたい。

平成十二年八月　　亡き博兄の初盆のとき

江連　晴生

【追記】　　「南郷庵通信」の再刊のことなど

亡き博兄が編集・刊行していた「南郷庵通信」(詩・俳句「評論・創作・研究」)は、平成十三年の五月二十五日付けの第五十四号が最後であった。そして、自治医大病院に入院したのが、六月十一日(月)のことであり、その最終号を出す頃は、病状の予兆のようなものがあったのであろうか？　この最終号に寄稿したものは、「定家・邦雄随感(十二)…吾が国の純粋詩…」というものであった。これらを読み返しながら、つくづくと、この亡き兄の意思を継いで、「南郷庵」の再スタートを切るということは容易ならざることを改めて思い知ったのである。

その容易ならざることに、いささか弱気の心が続く状態にあって、この「横書きの句集」の「流れゆくものの賦」の校正作業などを繰り返しているうちに、ここは、ペーパー(紙)による「南郷庵通信」ではなく、ペーパーレス(情報機器の電子図書)の「南郷庵通信」で行こうかと…、そうすることが、この句集の「横書き、ローマ字の読みの付与、間・切れなどの表示の付与」などの試行に叶うものであり、そして、そうすることが今後の句集編纂の一里塚になるのではなかろうかと…、そんな思いが次第に定着してきたのである。

このようなことから、この句集編纂の作業に併行して、「南郷庵通信」のホームページ化とメールマガジン化の作業に着手して、この句集が刊行される頃には、どうやら、このペーパレスの「南郷庵通信」も軌道に乗る目安がついてきたのである。そのアドレスとその内容(案)などは次のとおりである。

「南郷庵通信」(ホームページ)　　http://www.users.hoops.ne.jp/yahantei

(内容)　今までの「南郷庵通信」の紹介(亡き兄の詩と評論を中心とする)並びに「南郷庵通信」への寄稿(主として、俳句の実作の場)などを中心とする。

「夜半亭通信」(メールマガジン)　　http://www.melma/mag/20/m00062920/

(内容)　「流れゆくものの賦」の全句に注を施してのものなどを中心とする。

この二つのほかに、関連するホームページの整備なども進めていきたい。

「夜半亭ワールド」(ホームページ)　　http://www5.ocn.ne.jp/~yahantei/

「晴生ワールド」(ホームページ)http://www.geocities.co.jp/Bookend-hemingway/8645/

「夜半亭ドキュメント」(ホームページ)　http://www.isweb40.infoseek.co.jp/yahantei